

第四部

石井式のポイント
20.

〈ポイント 1〉漢字で教える

●……最初から正しい文字を

わが国の文字教育は、明治以来、「まずかなで読み書きすることを教え、それに習熟させた後でないと漢字を教えない」ということになっていま

す。
例えば、“がつこう”という便宜のないわば偽物を学習させ、それを習熟させた後に“学校”という本物を学習させているものですから、漢字の学習が必要以上に難しくなるのです。

“学校”という漢字で学習してこそ、“学びや”の意味が正確に理解でき、それが“学問”や“大学”にも結び着いて理解が深まるのであって、“がつこう”では“がくもん”と少しも結び着きません。

現代の心理学は、記憶について「覚えようと努力して覚えたものは忘れるが、覚えようと努力しないで覚えたものは忘れにくい」と述べています。

“漢字で教える”というのは、漢字を覚えることを目的とさせないために考え出されたものです。漢字は教育の手段であって目的ではないから、こうして覚えた漢字は一生忘れないはずだ、という考えです。

コラム 部首

宀

屋根のある家の象形字。家の意味の他に“上から覆う”。

【宮】 躬(身体)の意味の呂と宀との会意形声字で、“身体を休める家”という意味。“立派な住居”として使われる。「宮殿」「神宮」。

【宝】 宝玉の意味の玉と宀との会意字で、“たから物”を表す。玉は代表的な財宝で家に大切に保存しておくべき物だ、ということで玉を宀で包んだ。

〈ポイント 2〉 知識の八十三%が目から入る

●……“漢学で教える”実例

幼稚園で「手を洗う」という生活指導をしますと、黒板にまず「手を洗う」と書きます。すると、好奇心が強い幼児たちは、何を書くのだらうと黒板に目をやります。

そこで、黒板の字を指さしながら「手を洗う」と読みます。そして「今日は“手を洗う”ということで大切なお話をします。皆さんは、どんな時に手を洗いますか。はい、だれか？」と言って発言をうながします。

「手を洗う」という言葉を目にするたびごとに、黒板の字を指さしますので、幼児たちは「ああ、あれは“てをあらう”と読む字なのか」と思います。幼児期は記憶力が最も強いので、幼児たちはそう思っただけで、

この「手を洗う」が頭に焼付けられます。

私たちの知識は、五官別にこれを分類しますと、目によるものが八十三%、耳によるものが十一%、その他の合計が六%、ということになっています。目から得られる知識が圧倒的に多いのです。言い換えますと、耳に訴えるだけの教育は効率が良くないのです。

事実、耳に訴えると同時に、「手を洗う」という“目で見る言葉”により幼児の目に訴えますと、幼児は目と耳と二つの器官を使いますので、耳だけに訴えるのに比べて、ずっと良く頭の中に入ります。ある調査によりますと、「目と耳とによる記憶は、耳だけの記憶の六・五倍も強い」と言われています。

コラム 部首

广

麻という字に使われる垂またれという意味で麻垂またれというが、これは介のように、片側が開放された家を表したもので、よく出入りする家や、物を出し入れする建物を表す字に使う。

【庫】 “車庫”を表した字。今では広く

“ものを入れておく建物”の意味で使う。

「書庫」「金庫」。

【店】 お客に開放されている家の形の广と占との形声字。

「ポイント3」 “目で見る言葉”

●……漢字を見れば意味と発音がわかる

漢字は意味と発音との二つの言語要素を備えています。だから、漢字を見れば、その意味と発音が瞬時に頭にひらめきます。

例えば、花と鼻とは同じ“はな”という発音ですが、その字を見ればそれぞれの異なった意味内容をすぐに頭の中に思い浮べることが出来ます。しかし“はな”というかなでは、単にその発音を思い浮べられるだけで、その意味内容は少しも思い浮べられません。その発音を土台に改めて考えてみなければなりません。

それも、“はな”には“花・鼻”のほかに“端・華・洩”などがあるので、それらを一つ一つ思い浮べることが出来るというものではありません。それ

が漢字だと、一瞬のうちに思い浮べることが出来るのです。

このように、かなは言葉の要素の一つである“発音”だけしか表すことが出来ない文字ですから、“目で見る言葉”とは言えないのです。言葉の重要な要素の“意味”を備える漢字だけが“目で見る言葉”なのです。

コラム 部首

戸

家の出入り口につけてある、片開きの“と”の象形字。

【肩】 開閉する意味の戸と肉との会意字で、腕のつけ根の“かた”を表す。

【扇】 開閉する意味の戸と羽との会意字で、“ひらひらさせて風をおこす羽”、つまり“おうぎ”を表した。昔は鳥の羽で作った。

〈ポイント4〉 食事の前後に漢字カード

●……家庭では「漢字を教える」教育が良い

教育は長い期間に亘り、継続して実践することが大切です。「石の上にも三年」という諺がありますが、一旦、漢字教育をやってみようと決心したからには、ぜひとも三年間は継続して実践してほしいと思います。そのためにも、簡単な知識だけで容易に出来る指導方法を紹介します。例えば、母の好きな子供だったら、「この字は○○ちゃんの好きな苺という字よ。いちご、いちご」と言って教えます。普通の速さで、少し大きめの声で、口をしっかりと動かし、はっきりとした発音で読みます。

一日三回の食事の前後にやりますから、毎回十秒間かかるとして、一日の学習に要する時間はちょうど一分間です。この時、「これは苺という字よ。カードを見て、いちごと読んでごらんさい」と言って読ませるのは、一層良いことです。

二日目は、昨日教えた漢字カードを見せて、「これは何という字？読んでごらん」と言います。すると、必ずと言って良いくらい、その漢字を覚えて正しく読みます。

読めたら、「よく読めたわね。では、今日は新しい字を教えましょうね」と言って、次の漢字を第一日と同じ要領で教えます。二日目は、これをやはり朝、昼、夕と六回繰返します。前日の漢字カードを一回目で読めても、必ず六回とも質問して読ませることが必要です。

昨日の漢字カードが読めなかった場合は、初めて教えるような調子で、「この字はね。○○ちゃんの大好きな苺という字よ。いちご、いちご」と言って教えれば良いのです。決して、「昨日、六回も教えたのよ」と言って、子供を責めたりすることは禁物です。

コラム 部首

門

両方に開く扉のついた門の象形。“もん”が本義だが、“家”の意味にも。

【開】 かんぬきに手

をかけた形の开と門との会意字。“門をひらく”転じて広く“ひらく”こと。

【閉】 門にかんぬき

をかけ、そのかんぬきが動かないよう縦木を入れ、さらにその木も動かないようとめた形。“門をとじる”こと。

かなから教えていませんか

こうして、毎日「これ、何ていう字？」と質問するカードが一枚ずつ増えていき、八日目にはこれが七枚になります。その後も、毎日一枚ずつ新しいカードが追加されていきますが、一日六回、一週間質問して読ませたカードはそれで質問するのを打ち切りますから、質問するカードは七枚以上増えることはありません。

新しいカードが毎日一枚追加されますが、同時に一枚ずつ減へらしていきますので、毎日七枚のカードを質問して読ませ、新しく一枚の漢字を教える、というわけです。

こうして、三年間続けて実践しますと、一千字の漢字が覚えて読めるようになり、中学生向けの本でも読めるようになります。そうなれば必ず読書好きの子供になりますので、漢字力は益々伸びていきます。こうなったらもうしめたものです。

ポイント5 早いほど負担が少ない

●……“教科書が読めない”では困る

「塵も積もれば山となる」の諺の通り、一日に僅か一字ずつでも、ひと月には三十字、一年には三百六十五字。三年経てば一千字を超えるのです。「小を積んで大を成す」の努力が何よりも大切だと思っわけです。

三歳の頃からこの学習法を実践しますと、小学校に入学する前に一千字以上の漢字を身に付けてしまいますから、まだ小学生にもならないうちから、今の中学生以上に書物が読めるようになります。このようなりますと、読書が楽しく出来るようになり、学校が好きになります。

だから、幼児期のうちに一千字の漢字をせひとも身に付けることをお奨めします。幼児期の漢字学習は、幼児の楽しみにこそなれ、決して

コラム 部首

舟

舟の形を象った象形字。

【船】 沿の意味の合あ

と舟の会意形声字。

“流れに沿って下る舟”のこと。

コラム 部首

車

二輪車を象った象形字。

負担にはなりません。この時期を無為に過ごして、苦勞させて小学校で漢字学習をさせてはなりません。苦勞して覚えられる確信があるのなら結構です。しかし、七割の子供は失敗しているという現実だけは頭に置いてください。

漢字は、あらゆる教科学習の基礎力です。漢学力が強ければ強いほど、教科書を読取るのに要する時間が少なくて済み、その上、理解度が深いので、すべての教科学習の能率が非常に高くなります。

〈ポイント6〉 漢字は最高の“褒美”

●……雰囲気作りも大切

物事の好き嫌いというものは、最初の第一印象で決ってしまうことが多いものです。ですから、最初の漢字の提示の仕方がとても大切です。子供の関心に訴え、興味をそそるように工夫することが必要です。また、お母さん自身が、いかにも楽しくて仕方がないような様子を見せて、楽しい雰囲気作りをすることも必要です。

この漢字学習は、子供が良い子であったことの褒美としてやる性質のものであって、子供に義務として課すべき性質のものではないのです。漢字の意味が理解でき、漢字が読めるようになるということは、子供にとってこの上もない誇りであり、大変な喜びなのです。

【軒】 ふせぐ意味の干と車との会意形声字。“戦車”が本義。

「戒軒」(戦車)。矢を防ぐように覆いが設けられていて転じて、「覆い」「家ののき」の意味を持った。太夫以上の身分の者が乗る車を軒というのは、日光や雨風を防ぐ「覆い」のある車であるため。

コラム 部首

彡

いぬの全身を象った象形字。

【狼】 おおかみは恐ろしい動物なので、昔の人たちは「犬神様」「大神」と言って敬遠した。

「昨日は、ほんとに良い子だったわね。それでご褒美に、今日はこの漢字を教えましょう。この字はね、あなたの大好きな桃、“もも”という字よ。この字はね、中学生のお兄ちゃんやお姉ちゃんでもまだ習わない字なの（これは事実です。）でも、○○ちゃんは覚えて読めるようになれるわよね。では“もも”って読んで、「あらなさい」というように語り掛ければ、喜んで、張り切って漢字に立向かうはずですよ。」

「ポイント7」本の楽しさを教えましょう

●……絵本や漫画もキツカケに

幼いうちから童話やおとぎ話をよく聞かせ、次にそういう書物を読み聞かせることが大切です。そうすれば、書物というものは面白いものだ、ということは自然と解るはずですよ。

その他、絵本や漫画などから入るのも一つの方法です。ただ絵本や漫画ばかり読んでいますと、親の方がいらいらしてきて、「そんなものは止めて、ちゃんとした本を読みなさい」と言いたくなるものです。これが問題です。

絵本や漫画は、本の楽しさを子供に知らせるのにとっても役に立つものです。だから、こういうものを通じて本に十分に親しませる一方で、漢

コラム 部首

貝

二枚貝を正面から見た形を象った象形字。物々交換の時代は、軽くて小さい貝は貨幣的な存在。また海から離れた昔の中国では、貝の装飾品は入手しがたい貴重品で宝石に匹敵する価値があった。

【賃】 “人としての努

め（任）に対して支払われるお金”という意味で、任と貝との会意形声字。労働者が、その労働の報酬として受ける金銭を「賃金」というのは本義になっ

字を読む力を養っていけば、自然と高度な本を読むようになっていきます。

読書が苦手な子にとっては読書が苦痛なのです。

そういう子供が、絵本や漫画を読むのは立派なもので、「よく読んでいるね」と言って褒めるべきものです。それだけの価値がある行為であり、事実、褒めますと、子供は「もっと高度な本を読んでみよう」という意欲が湧いてくるものだからです。

だから絵本や漫画でも楽しんで読んでいるのを心配する必要はないのです。それが高度な読書への踏み台になるのですから、読まないことの方が本当は心配なのです。

〈ポイント8〉 幼児期こそ難しいものを

●……幼児は漢文も読める

私も漢文を幼児に教えてみました。すると予想以上に幼児たちはこれに取り組み、意外なくらいよく覚え、読ませてみますと、よどみなく読むことがわかりました。かねて私は、わが国で初めてノーベル賞を受賞された故湯川秀樹博士が、満三歳を迎えた正月から、論語などの漢文の学習を始めたという事実について、「博士の才能は特別に優れていたから、三歳で漢文が読めたのだ」という一般の考え方は誤りで、「三歳から漢文を学習したので秀才になったのだ」と推察していました。そこでまた世界的な数学者・広中平祐氏が文化勲章を受けられた次の日、テレビでアナウンサーが、「先生は子供の頃から数学が大層良く出来たと伺っ

コラム 部首

木

立ち木の象形。紙のない時代は木の札に字を書き、金属の道具のない時代は木を使っていた。だから記録に関するものや機械などを表すのに“木”を使う。

【機】 機微の意味の

幾と木との会意形声字。その働きの微妙である“しかけ”を表した字。

【械】 戒と木との会意形声字。“罪人を戒めるための責め道具”のこと。かせとも言ふ。転じて“しかけ”ということで「機械」。

ておりますが、学校の数学が易し過ぎてつまらなかつたのでは？」と問い掛けられるや、否や「とんでもない。数学の時間が最も楽しく、最も意欲的だった」と答えていらっしやいました。

「得意だから一所懸命にやる」というのが人間の本性であつて、「不得意だから頑張る」ということは、望ましいことではあるがなかなか出来ることではありません。

だから、私は、学校に進んで意欲的な学習の出来る子供にするために、幼児期から十分に学習させ、よく出来る、自信を持った子供にしてやりたいと思うのです。

へポイント9 母は“はは”“ぼ”“かあさん”

●……漢字に着せられた“濡れぎぬ”

母という字が“はは”“ぼ”“かあさん”というように、いく通りにも読めては煩雑だから“母さん”という使い方が禁止されました。しかし、“はは”“ぼ”“かあさん”はすべて言葉です。言葉がまずあつて、次にそれを表す文字があるのです。だから、煩雑というならそれは言葉にあるのであつて、漢字には全く関係のないことです。

例えば、“はは”という言葉しかなかつたなら、母という漢字は“はは”という読み方しかないことになります。だから、整理するなら言葉そのものを整理しなければ、本当の整理にならないのです。

また、「一つの漢字がいく通りにも読める」という言い方をするから

コラム 部首

禾

稲の穂が実つて垂れ

下がっている象形字。

【和】 豊年で“稲が十分口にはいる”こと、つまり「平和」。衣食足りて礼節を知る。食足りて心が“なごやかになる”とはよく庶民の情を表した字。

【税】 “分ける”“抜

く”の兌と禾との会意字。収穫物から租税として“別に分けておく禾”のこと。今ではお金で納めるから税金。

かなから教えていませんか

「煩雑さの原因が漢字にある」ように感じられるのです。「いくつもの言葉の一つの漢字で兼用させている」のが事実で、そういう言い方をすれば、「漢字は煩雑な言葉を整理し合理化している」ことになるのです。つまり、「漢字はとんでもない濡れぎぬを着ている」のです。「はは」「ぼ」「かあさん」は皆同じ概念の言葉です。同じ概念だから、同じ漢字で書き表すことこそ合理的であり、これを別の字で書くことこそ煩雑であり、不合理なのです。

〈ポイント10〉 大切にしたい自国の言語

●……日本人独特の脳の働き

角田忠信氏の実験によりますと、「日本人に限り、鳥の声や虫の音を左の脳で聴いている」ということです。しかも注目すべきことは、その異なった脳の仕組みが日本人の先天的な人種的特徴ではなくて、後天的学習的なものだ、ということです。

この発見は、「日本人の精神を司る大脳が、日本語によって形成される」という事実を証明する偉大な発見で、「日本語の特徴こそが、日本人の物の考え方を特徴づけている」ことが考えられます。

英語の教科書にある「There is an ox」という文は、普通、「一頭の牛がいます」と訳されますが、実は ox とは「一頭の去勢された牡牛」という

コラム 部首

米

稲穂にもみがついている形の象形字。

【粉】 “米を細かく分ける”こと。

【粘】 うるおう意味の占と米との形声字。
“うるおった米”の“ねばる”こと。

【糖】 もやしの意味の唐と米との形声字。
米のもやしから糖分である“あめ”を作る。

意味の言葉で、一頭でない牛は Oxen と言わなければなりません。

日本人は牝牡(めすおす)に関係なく、また数に関係なく、「あそこ
に牛がいるよ」という言い方をしますが、イギリス人やアメリカ人は、ま
ず牝牡を見分け、さらにその数を確認した後でない、そのことが言葉
にして言えないのです。

このように言葉のもつ性質の違いによって、物の見方や考え方がどうし
ても異なったものにならざるを得ないことがよく判っていただけと思
います。

コラム 部首

竹

竹の子の出始めた形
を象った象形字。竹を
薄く削って作った札
は、木の札と共に記録
に使われた。

【築】 筑と木の形声
字。地固めに丸太で
“木づく”こと。筑は木
でつく音を表したも
の。転じて“家”などを

〈ポイント11〉優れた言葉使いが生むもの

●……重要な“てにをは”の役目

日本語の特徴の第一は、何と言っても“てにをは”にあります。

“てにをは”を持つ日本語は、語順をどう変えても文意が通じます。

「僕は君に本を贈る」を「君に本を僕は贈る」とも、「本を君に僕は贈る」
とも、「君に僕は本を贈る」とも、「本を僕は君に贈る」とも言えます。こ
のようにどんなに語順を変えても、その意味は決して紛れません。この
点、中国語や欧米諸語は言葉の順序が一定していて、語順を変えたら
意味が通じません。こういうことが日本人の融通性に富む性格を作っ
ているのではないかと思われれます。

第二の特徴は、敬語法です。同じ意味(概念)の言葉に尊敬語と謙讓

“建てる”こと。

【簡】 竹と間の形声
字。間カンは刊カンの意味であ
る。竹を割って削り干
してこれに漆で書い
た。“竹ふだ”が本義。
転じて“書物”または
“手紙”のこと。

語とあって、相手の身分や親近の度合によってこれを使い分けている、ということですね。

例えば、“食べる”は前者では“召し上る”、後者では“頂く”と使い分け、“言う”は、“仰しゃる”“申す”、“行く”は、“行らっしゃる”“参る”と使い分けます。

このように言葉を正しく使い分けるためには、もちろん、言葉についての知識が必要ですが、それ以上に、相手の気持を尊重し、良い関係を保持するために、言葉を使い分けるのだという配慮が大切です。豊かな心は、豊かな言葉で養い育てるしかありません。外国にない複雑な用法ですが、ここに日本語の豊かさ、良さがあるのです。敬語法を確りと学んで、豊かな日本人の心を育てて頂きたいものです。

〈ポイント12〉 教育は親の仕事である

●……“教”とは父と子が交わることを表す字

学校教育というものが始ってから、親はわが子が良い学校に入れ、学費を出すのがその仕事であるかのようになっていました。

しかし、“教育”という字は、それが親の仕事であることを物語っています。“教”とは、父と子とが交わることを表した字です。父がその生き方をわが子に見せ、子はその父の姿から生き方を学び取ることを表しています。

“育”は、子を逆にした形の字と、肉(ニク)とで作られた字で、この字の発音(ニク)は肉の音に由来します。肉は食物の意味で、生れ出た子供に食べ物を与え、これを養い育てることを表したものです。

コラム 部首

艸 ↓ 艸

草の生えている庭を象った象形字。

【芽】 艸と牙との会意形声字。草木の“め”の出始めの形は牙の形なので、芽でこれを表した。

【苦】 薬草は干してよく乾燥させて保存する。“古い草”とは薬草。“にがい”が本義。

転じて“くるしい”となった。

【英】 “草の中央” “草花”が本義。特に房になって咲く花“はなぶさ”のこと。

このように、教育が親の仕事であることは、漢字の成立ちがよくこれを明らかにしています。

子供はまねが好きで、しかもそれを飽きずに繰返す(つまり、学習が好き)という性質があります。ですから、教育とは、「親が立派な言行を示すべく努力する」の一語に尽きる、ということが出来ます。つまり、子供の目や耳の届く所まで、言行に極力注意して、少しでも立派な親の姿を披露するように努力することです。

コラム 部首

日

太陽の象形。天候を左右し、時刻の基準とされたので氣象や時間に関係する文字の部首。

〈ポイント13〉母は慕われる母

●……嫌われる母親では説得力がない

“母”という字の発音は「ボ」です。この発音は“慕”という字の発音と同じです。ということは、「母とは“慕われる人”である」ということを意味しています。

“慕う”という言葉は、人間が人間に対してだけ抱く高度な感情です。“敬慕”という言葉があるように、その人柄が温かく立派で、自然と敬愛せずにはいられない、そういう人に対して抱く感情なのです。

ところで、母らしい母を表す言葉に“慈母”があります。“慈”は“慈愛”とも言い、太陽が草木に暖かい光を投げ掛けてこれを成育させるような、報償を求めない愛の心を表した字です。

【晩】 “のがれる”の

免と日との会意形声字。日のがれ去るとは、“日が沈む”こと。“おそい”が本義。

草本は太陽を慕うように、必ず太陽に向って
 じように、子供は慈母を慕い、その慈しみを受け
 だから“慕う”とは、母の慈愛に応じて起る子供の
 しよう。

つまり、“慕われる母親”とは、草木を育てる太
 大きく包容して育てる慈母のことである、というこ
 のように、わが子を
 が出来ます。

コラム 部首

月

半月の象形。太陽に
 比べ欠けている時の方
 が多いのが特徴。

【朝】 草と舟月との
 形声字。草の間に太陽
 が見える“あさ”を表
 した。

〈ポイント14〉言葉は人の心を養い育

●……親と子の楽しい思い出をつくらう

幼稚園で、友達とうまくやっていけない子、先
 れない子というのは、親に会って話合ってみますと
 たように「独りでよく遊んで手のかからない良い
 いか独りでよく遊べるからと言って、放ってお
 間”になれません。人の“間”に置かれて、顔を合
 “人間”になれるのです。それまでは、動物的な
 万物の霊長たる“人間”ではありません。

過保護はいけません、人間の子は親の保護
 親の口から発せられる言葉を耳にし、それをま

【有】 ナ(手)と肉月
 の会意形声字。右手に
 肉を持つ形で“もつ”が
 本義。「所有者」。転じ
 て“あること”。

る
 のお話に耳を傾けら
 ほとんどが口を合せ
 たた」と言っています。
 たのでは、“人”は“人
 言葉を交して初めて
 に過ぎないのであって、
 絶対に必要なのです。
 ことによって言葉を

覚え、人間の心を養い育てているのです。

昔は、赤ちゃんの周囲にはいつも人が大勢集り、声を掛けたものです。だから、皆、人間らしい人間になることが出来ました。ところが今は、核家族と呼ばれる小家族のため、赤ちゃんは人間の声を聞く機会が少なくなりました。

それだけに、昔よりも一層親の責任が重くなったわけです。独りで遊んでいるから良い、と考えないで、出来る限り子供の相手になるべきです。親としてそれは何よりも大事な仕事であって、楽しい仕事のはずです。親子のこうした営みは、子供が成人しても心温まる思い出となり、また親としても楽しい思い出となります。

〈ポイント15〉 言わぬは言うに勝る

●……幼児は生れつきの学習好き

“学習”という言葉は幼児のために作られたようなもので、人間の一生のうちで、幼児期ほど、“学習”好きな時期は無い、と言えます。

幼児はだれでも学習好きに生れついているのですから、黙ってただ温かい目で見守っていきえすれば、それだけでうまくいくはずなのに、脇から親が余計な口出しをして、子供のやる気をそいでいる、というのが遺憾ながら実情です。前に取り上げましたが、このことを“助長”と言って、親の最も陥りやすい弱点です。“助長”は親の自己満足に過ぎず、事実には子供をそこねるだけの行為ですから、くれぐれもご注意が肝要です。「親の言う言葉で最も嫌な言葉は何か」を調査したことがあります。

コラム 部首

火

火の燃えている形。

【炭】 山の崖の意味

の戸と火との会意字。

“すみ”は山の中腹で焼いて作ることを表す。

その第一に、「勉強しようと思っている時に“勉強しなさい”と言われること」が挙げられています。正に「言わぬ」は“言う”に勝る」です。

温かい親心が子供の人情を育むのです。「目は口ほどに物を言い」の例え通り、黙って見守る温かいまなざしが、子供の心を明るくし、安定させ、人間らしい心遣いを育てることを可能にします。

コラム 部首

口

人のくちの形。

【古】 十と口との会意字。“十代にわたって口から口へと伝えられた”こと。

【咲】 ロと艹(シヨウ)との会意形声字。“口を開いてわらう”のが本義。

〈ポイント16〉「隣りの子を見習え」は止めましょう

●……「言わぬ」に勝る言い方

「言わぬは言うに勝る」ということで、雄弁の銀に対して「沈黙は金」の諺があります。しかし、言葉は、適切に使われるならば、これほど価値の高いものではありません。

だから、本当は「言わぬは言うに勝る」であってはならないのです。沈黙が金であるならば、ダイヤモンドのような輝きを持った言葉の使い方をしたいものです。

例えば、子供が学校へ通うようになり、成績簿を家に持ち帰った時、それについて言う親の言い方が二通りあります。

「八十点か。これ位の点で満足してはだめよ。もっと頑張って、今度

は百点を取って来なさい」

「お母さんはね、よく百点を取ったものよ」というのがその一つです。

「まあ八十点。よくやったわね。偉いわね。でもお母さんはね、お前のことだからきつとこれ位はやる、と思っていたわよ」という言い方がその二です。どちらの言い方が子供にとってやる気を起こさせるでしょう。もちろん後者です。前者の言い方をされたらやる気が起きるところか、意気消沈です。

また、前者のような言い方をする母親は、百点を取って来たら満足するかと言いますと、決してそうではありません。「それでお隣りの○○ちゃんは何点だった？」とか、「百点取った子何人くらいいた？」とか言って尋ねます。

わが子だけが百点だったということだと満足しますが、もしも「お隣りの○○ちゃんも百点だった」「百点を取った子が大勢いた」と聞きま

すと、途端に不満な顔になります。

もしも反対に、お隣りの○○ちゃんが百点で、わが子が八十点だったらどう言うでしょう。「お隣りの○○ちゃんはえらいわね。お前も○○ちゃんを見習って、同じように百点を取らないと恥ずかしいでしょ」と言います。

親は子供を奮起させようと思って言うのですが、こういう言い方は奮起させるどころか、子供にやる気をなくさせるものです。それは子供の立場に立って考えたものではありません。子供に親の愛情を感じさせる言葉でなければ効き目はないのです。

コラム 部首

水

川の水の流れる形を表したものだ。

【油】 由という川の名前。この川はとろりとして波一つ立たないので“とろりとした液体”“あぶら”のこと。

【泳】 “水中に泳ぐ”のこと。

〈ポイント17〉 親子で一緒に読むためのお話

●…聞いて、理解し、覚える

毎日子供の喜ぶお話を繰返して聞かせることが、効果の高い“言葉の教育”法なのです。子供は、好きな話は何回聞いても決して飽きることはありません。子供のその要求に忘れて何回でも繰返してお話をするのが大切です。

私も毎日毎晩、わが子にせがまれて話をしたものです。子供は決して新しい話をせがみません。毎日毎晩、同じ話を聞きたがるのです。それも一度や二度では満足しません。終るや否や「もう一回して」と言うのです。

そのくらい子供は“繰返し”が好きです。だから、子供の好きなお話は、決して“繰返し”があります。挑太郎では、「挑太郎さん、挑太郎さん。お腰に着けたものは何ですか」に始まる問答が三回繰返されます。猿蟹合戦でも、蟹が水をやりながら「早く芽を出せ柿の種。出さぬと鉄でちよん切るぞ」というせりふをやはり三回繰返します。子供はこの繰返しが大好きで、その三回目には子供の喜びは最高潮に達します。

だから、この三回目は、特に力を込めて芝居気たっぷりに話してやりましょう。そうすれば、子供もそれに合せて得意気にせりふを語るでしょう。ところが、この三回目を「同じようにして」と言って省略してしまう親が多い。これでは楽しさは半減、学習効果も半減してしまいます。繰返しは、一見無益な行為に見えますが、これほど大切なものではありません。回を重ねることに習熟し、身に着き、能力が伸びるのです。繰返しはいくら繰返しても、多過ぎるということはないものです。

コラム 部首

金

土の間に混入している金属の塊を表す並と今との形声字。“金属”のこと。

【針】 十が本字。十は針に糸を通した象形。

【錦】 “金糸銀糸を織り込んだ帛”で金と帛との会意形声字。

【銀】 “金に続く”という意味で金に続く価値を持つ金属を表した字。

〈ポイント18〉漢字は幼児期にこそ

●……特別な意識はいらない

一九三〇年以來、アメリカでは多くの学者がチンパンジーに言葉を教える努力を払ってきましたが、チンパンジーはついに言葉を覚えることが出来ませんでした。チンパンジーは言葉が覚えられないので、何万年経っても少しも進歩がないのです。

言葉の習得こそ人類にだけ許された切り札的な能力で、これを伸ばすことこそ何事にもまして重要な能力ですが、この能力も幼児期を外したら、どんなに教育しても出来ないことが、フランスの言語心理学者ポール・ショジャールの調査で明らかにされています。

わが国の主要な文字は漢字です。だから、漢字力を養うことが何にもまして大切なのです。

その漢字力は、言葉と全く同じで、幼児期にこれを養い育てなかったら、あとでどんなに努力しても手遅れです。漢字力を付けるには別に難しいことはありません。

幼児が両親の会話を耳にしている間に、ひとりでに言葉を覚えるように、漢字も、これを特別教えるのだという意識を持つ必要は全くありません。幼児は漢字を知りたがっています。だから幼児の目の届く所に漢字がたくさんあり、親がこれを声に出して読んでいけば、幼児はひとりでに漢字を覚えます。教えようとすれば、かえって拒否し、覚えられないものです。

幼児は本来好奇心が強く、何事によらず知りたがっているのですから、強制する必要は全くないのです。好奇心をそそるような配慮が大切です。

コラム 部首

土

草木の芽が地上に出始めた形を象ったもので“つち”のこと。

【地】 “へび”の本字の也と土との会意形声字。へびのようになうねっている大地。

〈ポイント19〉 好奇心は進歩の原動力

●……幼い時期に“発見の喜び”を

幼児期ほど好奇心が強く、絶えず好奇心に満ちた目を輝かせて新しい発見を求め回る、という時期は他にありません。そして「これは何だろう」「どんな働きをするものだろう」と常に疑問を抱き、その解明に努めます。

好奇心は強い意欲の表れであって、これが進歩向上の原動力であり、有難いことに、どの子にも立派に備わっているものです。この好奇心がある限り、子供はひとりでに頭を使って思考しますので、智能は自然と向上するわけです。

幼児期には、この「自分の頭を使って思考する」ことが大切で、知識を蓄えることなどどうでも良いことなのです。知識を広めるのはいつでも出来ることですが、智能を向上させることは幼児期にしか出来ないことだからです。

だから、“蟻・蜂・蝉”……という漢字を、それらの事物の体験に忠じて教えるのはいいですが、「これらの字をよく見てごらん。同じ形をした所があるよ」と言って教えないほうが良いのです。まして「虫」という所が同じでしょ。これは“むし”という字で……」などと教えてはいけません。

それは幼児から“発見の鋭い喜び”を奪うことになります。そのような知識は与えなくても、幼児に必ず発見できることなのです。早いか遅いかはあっても、必ず気が付くはずです。それまで待つことが大切なのです。

コラム 部首

田

整然と区画された“た”の象形。中国では“た”も“はたけ”も田で表す。日本では田は“水田”で、稲を作る所。他の作物を作る“はたけ”は「畑」「畠」で表す。

【画】 田の境界をはつきりさせることを表した字。“区切る”こと。

【畔】 “田を両方に分かつ、真ん中の道”。“あぜ道”。転じて「湖畔」「河畔」。

〈ポイント20〉 子供の問いを尊重しましょう

●……親子の会話を楽しもう

“学問”という言葉が“質問”の“問”という漢字によって作られているように、質問は学問の重大な要件です。多くの物事に対して疑問を抱き、これを追求する気持が強いことにより、深い学識を身に着けることが出来るのだと思います。

子供の強い疑問に対して親がいつも冷淡でいますと、子供は「疑問を解決することの喜び——知ることの喜び」をいつも味わうことなく終りますから、自然と「疑問を持つとうとしない子供」になってしまいます。

昔から「問うは一時の恥、知らぬは一生の恥」と言われていて、質問することに恥ずかしさが伴うものとされています。事実、私たち大人は、疑問があつて、それを知りたいと思いつつ、恥ずかしさのためなかなか人に尋ねることをしません。

ところが、幼児は、質問することを少しも恥ずかしいことと思いません。だからこそ幼児は目を輝かせて質問をするのです。それ故に、幼児の質問を大いに歓迎し、喜んで答えるならば、ただ知識が豊かになるだけでなく、いつまでも質問することを恥ずかしく思わない人間になれるのではないかと思います。

このような幼児期の親子の語り合いほど、いついつまでも、思い出して心温まるものはないでしょう。こういう思い出を胸に持つ親子は生涯ずっと幸福だろうと思います。

コラム 部首

虫

まむしの象形。

【蟻】 正義の意味の義と虫との会意形声字。“秩序整然たる団体生活を営む虫”“あり”を表す。

【虹】 虫は地中、地上のみならず空中にもいる。そして大きいものから小さいものまで多数いる。空中の虫が工作をしたように見えることから、「虫」と「工」で虹を表している。